二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程　特別選考制度入学試験問題
［小論文］　【国語教育専攻】

解答上の注意

一。解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。

二。無解答の解答用紙でも提出すること。

三。問題用紙は「二枚」（本ページ含む）、解答用紙は「一枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 特別選考制度入学試験問題
【小論文】 【国語教育専攻】

問題　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一　国語単元学習での学びの実感

単元が生まれるきっかけは、教師の子どもへの問いかけかもしれない。しかし、単元は一人一人の子どもの内に成立する。一人一人の子どもの問題意識が触発され、そこから生まれる課題を解決していく過程が単元になる。この解決していく行為こそ学びである。

では、学習者が自身の学びを実感するとは、どのようなことか。

「子どもは捉えにくい」と倉澤栄吉先生は言われた。それだけに「教師の足腰が鈍っては、単元学習もあったものでない。口舌の徒は単元指導者にはなれない。教師がボリュームを上げれば狭い教室内に響きもしよう。いっとき制止もきこう。しかし足で近寄って手を差し伸べる個別指導からははるかに遠い。」[注1]という戒めは重い。

常に、子どもと向き合い、子どもの言動、表情や醸し出す空気から読み取る。これは「言うは易し、行うは難し」である。教室の話し合いでも、評価者、演出家としての教師は多い。しかし、子どもとともにある、参加者としての教師になると、優れた話し合いになる。

二　学びの中にある生きる「じたばた」

単元指導者としての教師は自分から、子どもの姿に問いかける。どんな学びを実感しているか、と。

そこでは、ついつい教師が意図し求めた言動や活動を確認すれば、よい学びが営まれていると思い込みがちである。つまり「教師の質問に正しい答えを言っている」「指示された活動をよどみなく行っている」ことでよい学びだと済ませてしまう。

子どもが学びを実感するのは、このような成果や到達にだけではない。学びには、間違いや停滞、躊躇、失敗や諦めもある。そもそも学びは子供の生きる行為である。自らのために探究し続ける行為である。そこには、諦めや躊躇もあれば、迂回や克服、学びをめぐる喜怒哀楽といった、生きる「じたばた」がある。

このような子どもの生きる「じたばた」にこそ、学びの行為の過程を読み取れる。子どもがどのような学びの過程にあるかを読み取り、共感したり助言したり、共に考える教師が単元指導者である。子どもが学びを実感するためには、生きる「じたばた」を認めてもらうことで、生きている実感を重ねることが必要である。

三　学びの過程を楽しいと思うこと

今井むつみ[注2]は「学びとはあくなき探究のプロセスだ」とし、「遊び」の中から探求心を育むのだという。そして「遊びの五原則」の第一に「遊びは楽しくなければならない」をあげている。さらに、学び自体が目的であること、自発的な選択によるものであること、能動的な行為であること、現実から離れた演技のようなものであること、をあげている。これをヒントに、「遊び」をそのまま「学び」に置き換えて、次のような学びの実感を引き出せたらよいのではないかと考える。

○　知った、理解した、できたというのは楽しい。

読むことの指導事項でいえば「構造・内容の理解」段階の学習活動を通して得られる学びの実感といえる。

○　深く考え、考えたことを実現できるのは楽しい。

「精査・解釈」段階の学習活動での学びの実感になろう。関係づけをしながら広げたり深めたりする楽しさを感じることになる。

○　もっと学びを広げたい、深めたいと思うのは楽しい。

「考えの形成」段階で、一人一人が得られた「自分の考え」を実感するものになる。

子どもは学びの様々な過程で楽しいと思う。それを教師が狭めてはいけない。ねじ曲げてはいけない。学習を振り返り、どんなところ、どんなときが楽しかったのか問いかけてみるとよいのではないか。

四　「個別最適な学び」と「協働的な学び」

国語単元学習は、総合的である。一人一人に応じるが望まない「孤独」にはさせない。学び合いや協働的な学習活動を通して一人一人の学びを深めようとしている。

二〇二〇年一月の中央教育審議会答申で「令和の日本型学校教育」の構築を目指すために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実をあげている。特に、個別最適な学び（個に応じた指導としての指導の個別化と学習の個性化）を推進するあまり「孤立した学び」に陥らないよう、「協働的な学びの充実」も説いている。これは、「一人一人に」という言葉が独り歩きして、子どもにとって望まない「孤独」に追いやることを戒めている。個別に暗記と訓練だけの指導ではない。本来、指導は学びを援助するため、一人一人の学びの過程をとらえて適切に行うからこそ、意味がある。そうすることで教師もまた学習者とともに学びを実感することができる。

注1　倉澤栄吉『解説　国語単元学習』（一九九三）東洋館出版
注2　今井むつみ『学びとは何か――〈探究人〉になるために――』二〇一六（岩波書店）

（笠井正信「学習者が学びを実感する国語単元学習」『月刊国語教育研究』No.588、日本国語教育学会、二〇二一年四月）

問1　一から四までの小見出し相互の関係がわかるように、この文章中に登場する「倉澤栄吉」は、戦後国語教育のどのようなことに貢献したとされる人物か。知っていることを書きなさい。

問3　「国語単元学習は、総合的である」と述べられているが、ここでいう「総合的」とはどのようなことか。具体的な実践事例（あなたの教育実践でもかまいません）をもとに詳しく説明しなさい。

《注意》解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。解答用紙の「問題番号」欄に「問題」と記入した上で、問1・問2・問3とそれぞれ記入してから、続けて解答を記入してください。解答用紙は裏面も使用可です。